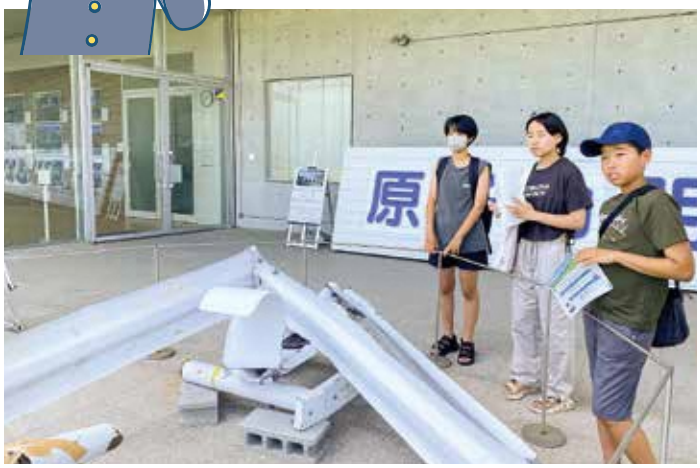
能登半島地震の被害にあった石川県能登町を訪問し、地域の方と交流するとともに、福島県の現状について学んだことを発信しました。

東日本大震災・原子力災害伝承館を見学し、震災による被害や復興へ向けた取り組みについて学び、理解を深めることができました。



チャレンジ！子どもがふみだす体験活動応援事業

「ふくしまの未来」へつなぐ体験応援事業

令和7年度　実践事例集

東日本大震災の被害を受けた場所を訪問し、震災語り人からこれまでの復興への歩みについて教えていただきました。

台湾の学生との交流を通じて、「福島の現状と復興」を国内外に発信することができました。

〈主催〉福島県教育委員会

事業内容・実績

ふくしまの復興に貢献したい！

一歩ふみだす子どもたちを応援します！

東日本大震災から15年が過ぎ、震災を体験、記憶していない子どもたちが増えてきています。福島県では、「ふくしまの未来に向けた創造的復興教育」を実施し、新生ふくしまを担うたくましい子どもたちの育成を図っています。

この事業では、東日本大震災の経験を踏まえ、子どもたちが震災について学ぶ福島ならではの社会体験活動・社会貢献活動を推進し、復興に貢献しようという思いを高めています。また、その思いを具現化し、主体的に復興の発信や教訓の継承等に寄与する社会体験活動を県内外で広く行うことで、子どもたちの「志」を育み、復興・地域創生の担い手を育成する事業です。

採択条件

子どもたちが主となって自ら考え、判断し、行動を起こす社会体験活動・社会貢献活動等や地域の復興を支援する取組で、以下のいずれかの視点に係る事業とします。

(1) 被災者や避難者、復興関係者、支援者等との交流活動等の取組
(2) 地域の復興を考え、県内や他県、海外等へ復興をアピールする取組
(3) 地域の将来を見据え、地域活性化を実現する取組

補助事業者

福島県内に主たる活動拠点があり、県内に事務所を有し、地域において青少年育成活動に取り組んでいる実績を有している団体（市町村、国公立学校、PTA、NPO　等）

補助額

事業1 上限 **50万円**　事業2 上限 **200万円**

※補助金額は、補助対象経費の8／10以内、または上限額どちらか低い額。
※海外での活動も認めます。（ただし、海外渡航に係る経費を除く）

事業1

元気を届ける交流・体験事業

避難者や被災者との交流を通して、子どもたちが元気を創出する活動

（例）仮設住宅、復興住宅等訪問及び被災者、避難者との交流　等

主体的・対話的で深い学びの実現

復興をテーマとした課題解決型学習

事業2

今を知り思いを伝える事業

①ふくしまの「今を知る」活動
②復興への「思いを伝える」活動
※①②のどちらも子どもたちが主体となって行うことが必須

（例）●被災地や震災関連施設等の訪問や被災者、避難者との交流・協働　等
●地域の復興を考え、県内外への発信を行う活動や復興へ向けた取組や現状、ふくしまの元気や地域の特色の発信　等

地域への誇り　自立心　創造性　社会性
困難を乗り越える力　実行力　郷土愛

自己肯定感の高まり

新生ふくしまを担うたくましい子どもたちの育成

福島ならではの教育として全県で推進

事業実績

令和７年度は25団体からご応募いただきました。
●採択団体 24団体　事業1／1団体　事業2／23団体

事業内容・実績

❶ふくしまの「今を知る」活動

～震災のことや復興の状況を学ぶ～

交流をとおして「今を知る」

震災関連施設を見学して「今を知る」

被災地を訪問して「今を知る」

フィールドワークをとおして「今を知る」

❷復興への「思いを伝える」活動

～多様な表現方法で学んだことを発信～

県外の方々に「思いを伝える」

海外の学生との交流で「思いを伝える」

オンラインをとおして「思いを伝える」

プレゼンテーションで「思いを伝える」

紙芝居を使って「思いを伝える」

歌をとおして「思いを伝える」

実践事例 事業1 元気を届ける交流・体験事業

事業名 会津美里町×楢葉町 絆伝承・交流宿泊体験活動

団体名 会津美里町

この事業のポイント

姉妹都市である楢葉町において、東日本大震災の体験を風化させず、次世代につなぐため、学校活動では体験の出来ないことを経験し、会津美里町と楢葉町の子どもたちの交流を図るものである。

具体的には、楢葉町の天神岬スポーツ公園を中心に、豊かな自然環境や日常とは異なる生活環境の中での集団生活や体験的活動を通して、異年齢の子どもたちがふれあいを深め、自立心・協調性を育むとともに、自然の雄大さ・大切さを体感した。

また、夏の活動では、楢葉町を拠点とした子どもたち同士の交流や、震災遺構の見学、交流についての語り部の講話を通して、東日本大震災時の楢葉町と会津美里町の交流について知り、助け合いの大切さについて考えを深め、冬に実施した会津美里町での交流事業（雪体験など）につなげることができた。

楢葉町長より震災の説明を受ける

取組内容

みるーる天神において、楢葉町長より震災時の説明を受け、災害の被害状況を知ることができた。引き続きJAEAに移動し、震災復興に向けた実験棟などの取り組みを見学した。

野外炊飯では、マッチを使った火起こし体験を行うとともに、BBQをした。自分たちで調理したため焦げのあるご飯もBBQスタイルで大変おいしく食べることができた。

翌日は、岩沢海水浴場において、磯遊びや海水浴を楽しむことができ、昼食に防災カレーを食べ、会津美里町と楢葉町の子どもたちが交流を深めることができた。

実践事例 事業2 今を知り思いを伝える事業

事業名 商業科課題研究　福島 S-HART 事業

団体名 福島県立清陵情報高等学校 商業科課題研究　福島 S-HART 事業

この事業のポイント

本事業は、福島県相双地区の復興の現状や復興の取り組みによる地域活性化の様子を実際にフィールドワークを行いながら、復興に向かう考えや活動を学び、本校が所在する須賀川地域発展のために地域の活性化と振興、発展の拠点となりうる福島空港を活性化することを目的に活動している。

福島空港活性化プロジェクト（福島S－HART事業）は、本校と千葉商科大学、銀座ミツバチプロジェクトや株式会社ふるサポから協力を得ながら、さまざまな活性化に資する活動に取り組んだ。福島空港フィールドワークを行い地方空港の課題を理解しながら、高校生が探究的に地域課題解決のために活動を行うことができた。アロマキャンドル作成体験会や須賀川市と共催した「光のまち・須賀川　ウルトラマンポスターコンテスト」を開催し、SNSや高校の探究活動のサポートをしている“福島を変革する男　OKさん”と協働して活動を発信し、充実した活動を展開することができた。

小高フィールドワーク

取組内容

○小高フィールドワークでOWBの取り組みと小高区・浪江を中心とした相双地区の復興について学んだ。
○須賀川市の現状を知るために、須賀川市観光交流課から財政や市民に対する取り組みについてディスカッションを行い理解を深めた。
○福島空港フィールドワークを行い、現状と活性化についての取り組みを学んだ。
○“福島を変革する男　OKさん”と協働して、SNSで福島空港活性化プロジェクトの情報発信に取り組んでいる。
○須賀川市と共催で「光のまち・須賀川　ウルトラマンポスターコンテスト」を実施した。
○福島空港活性化の取り組みとして、アロマキャンドル作成体験会を実施した。

事業名 元気を音楽にのせて～福島からキックオフ！～

団体名 Seeds+

この事業のポイント

本事業では、福島の子どもたちが被災地である石川県能登町へ直接赴き、音楽交流とボランティア活動を組み合わせた遠征を実施した。

現地では、地域の子どもたちや住民との対話、共演を通して心を通わせるとともに、被災状況の視察や関係者からの話を聞く機会を設けた。これにより、災害を教科書や映像による「知識」としてではなく、実際の空気や声に触れる「実感」として学ぶことができた。また、自分たちに今できる支援について考え、行動に移す経験を重ねた。

被災経験を持つ福島の若者が、今度は支える側として被災地に向き合うことで、他者への共感や社会への関心を深め、将来につながる主体性と行動力を育むことを本事業の重点としている。

能登町にて、フィナーレ演奏

取組内容

○本取組では、被災地である石川県能登町を実際に訪問し、現地の状況を自分の目で見て、耳で聞き、肌で感じる学びを大切にした。
○音楽交流コンサートでは、演奏を通して言葉を超えたつながりが生まれ、参加者は人と人との関係性の中で支え合うことの大切さを実感した。
○被災状況の視察や関係者からの聞き取りにより、復興の現状や課題について理解を深めることができた。
○事前学習では福島と能登の共通点や違いを学び、事後の振り返りでは感じたことや考えたことを言葉にして共有した。
これら一連の取組を通して、社会に目を向け、自ら考え行動する力を育む機会となった。

事業名　地域の宝　只見線×陸羽東線 災害からつながるプロジェクト

団体名　只見線くろすひるず（只見線こども会議）

この事業のポイント

東日本大震災、新潟・福島豪雨災害から復旧を果たした只見線沿線では、鉄道の全線運転再開は「ゴールではなくスタート」であることを重要なポイントとして捉えており、「只見線こども会議」では「どのように地域を盛り上げられるか」を考え、数多くの活動をしている。

今回、東日本大震災による鉄道への被害を学び、「災害復興」「東北地域」「鉄道」と只見線と同じ課題を持つ陸羽東線と連携することで、お互いの「地域の宝」を通じ、自分たちの活動に誇りを持ち、地域の担い手としての自覚を高めることを重要なポイントとして事業を実施した。

陸羽東線での移動

取組内容

○東日本大震災の学習成果と、只見線の応援活動を発信するため陸羽東線沿線を訪ねた。
○陸羽東線沿線の宮城県大崎市・美里町それぞれの関係者に福島の現状を伝えるとともに、大崎市・美里町の災害状況もお聞きし、双方の理解を深めた。
○自分たちの活動はこれまで失敗も少なくなく、活動の内容について悩んでいたが、相手の方も悩みながら様々な活動に踏み出しており、自分たちだけじゃないと感じ、勇気をもらうことができた。
○今後も交流を希望する声があり、次につながる訪問となった。

事業名　中高生の紙芝居による伝承活動応援事業

団体名　特定非営利活動法人富岡町3・11を語る会

この事業のポイント

世界に類のない複合災害から15年経つ「福島」で、「記憶にない」「生まれていない」世代の若者や子どもが、体験した語り人から話を聞き、実際に被災地（富岡町）を訪れて学ぶ時間を持つこと、学んで知ったことを「紙芝居」を通して人に伝えていくこと、この活動にチャレンジすることが、この事業の目的である。

紙芝居の専門家とのワークショップで、紙芝居の演じ方、面白さを発見し、発表の場を経験することで、人に伝えることの難しさと伝わった時の喜び、さらには伝えることの重要性を実感する。

震災を通して、福島に生きる自己のアイデンティティを発見する機会ともなっている。

自作の紙芝居制作は、柔軟な思考力と新鮮な表現力が、オンリーワンのオリジナル紙芝居を生み出し、それを他に伝える事によって、出会いと新たな人の繋がりが生まれることに気づいた。

自作紙芝居制作をして発表をした

取組内容

取組①　中高生の紙芝居上演
○昨年度体験した高校生に加えて中学生が新たに参加した。
○「紙芝居」について「紙芝居の歴史」「文化的価値」「上演の方法」などを、専門家から学ぶ。
○東日本大震災、原子力災害について、語り人（体験者）の話を聞き、被災地の現状や課題を知る。
○紙芝居として伝えたい震災に関するテーマを選び、上演方法などを工夫し、練習する。
○実際に、紙芝居を伝承活動として上演する。（児童クラブ、地域交流カフェ、町内外のイベントなど）

取組②　自作紙芝居の制作
○被災地の中学生高校生の視点から見た「町の魅力」「町の課題」を、紙芝居として、文・絵を作成する。
○自作の紙芝居を上演する練習をする。
○自作の紙芝居を、実際に上演する。（児童クラブ、町や県のイベント）

事業名　『福島の今までが繋げる～経験者のあの日の記憶～を伝承者が明日へ伝える』備える希望へ

団体名　子どもに音楽を贈る会

この事業のポイント

音楽を中核とした各活動を通じて、子どもたちの発する問題提起により、大震災の持つ生活への影響、子どもたちの人間関係への影響等を見る人に考えさせ、風化を防ぐ効果があると考える。

特に、県外の開催においては、改めて福島の震災の根深さを知り、震災を自分のものと考えさせる契機になり、自治体、教育関係者等による被災地視察等も組まれ継続的な関係が生まれてきている。

当事業の実施により、多くの音楽会を実施し活発化させ、地域・文化振興にもつながっていく。また、子どもたちの語り部としての震災授業と『福島の今を発信展』を組み合わせ、ミニコンサートや地域の方々との交流、心の防災コーディネートMAPを配布することなどにより、今現在の福島の復興状況や福島に生きる人々の心の葛藤と希望をより強く伝えることが出来、発信する側も、震災の影響を受けている子どもたちの心の整理や、被災当事者の方々に伝えていく大切さを感じることができる。

石川県珠洲市訪問（発信用冊子配布）中学生・地域の方々との交流学習会

取組内容

①「福島しあわせ運べるように今の思いを発信プロジェクト」『クリスマスユーチューブ配信』
②「福島の今の思いを発信活動」
○福島の伝統工芸体験学習会（大堀相馬焼）『窯見学・交流会』
③発信用冊子「心の防災コーディネートＭＡＰ④」取材・学習会
○東日本大震災学習会（宮城県・岩手県）
○新潟県中越地震学習会『震災学習・交流会・福島の今を発信活動（山古志小中学生と地域の方々）』
④令和６年能登半島地震及び阪神淡路大震災学習会・冊子を使った発信活動
○「石川県珠洲市の中学生、地域の方々」との交流
『福島の今を発信ワークショップと今の福島発信震災学習』を行った。
『神戸市長田区「大正筋商店街」コンサート』『神戸長田区鷹取地区の方々、被災地NGOの方々と福島発信交流会』
⑤発信用冊子「心の防災コーディネートＭＡＰ④」1000部作成
○震災取材の方々、「今の福島発信震災授業」等様々の交流時に発信素材として配布。二本松市内小中学校、浪江、新潟、神戸、東京多摩市、熊本関係者へ寄贈した。
○資料展示『福島の今を発信展』を交流会等で組み合わせて子どもたちが解説者となり開催した。

事業名 映像と英語で世界に届けよう ふくしまの子どもの未来

団体名 アトリエハウス児童クラブ

この事業のポイント

本事業では、子どもたちが東日本大震災を自らの視点で捉え、過去をもとに未来を主体的に考える力を育むことを目的としている。アトリエハウスではその実現のため、映像制作という総合的な表現手法を導入し、企画・取材・編集・発表までを一貫して体験できる学習設計を行った。映像は多様な工程を含むため、役割分担や協働、コミュニケーションなど、キャリア教育として重要な要素を自然に学べる点が特徴である。また、タイの小学生との交流を取り入れ、互いの文化を紹介し合う場を設けたことで、子どもたちが国際的な視点から震災と自分たちの未来を見つめ直す機会を創出した。異文化の同世代と対話し、震災について説明する経験は、自己理解と震災理解を深める貴重な学びとなった。さらに、完成した映像を地域に公開し、子どもたちが自らの表現が地域の未来につながる実感を得られる発信の場を設けたことも、本事業の大きな強みである。

映像制作ワークショップ

取組内容

活動は、映像制作・震災理解・国際交流を段階的に組み合わせて実施した。まず、企画づくり、インタビュー技法、撮影・編集の基礎など、映像制作に必要なスキルを学ぶワークショップを行った。その上で、震災について座学を通して学び、完成映像を想像しながら、何を取材すべきかのテーマ決めと事前想定をした。その後、いわき震災伝承みらい館での調査・インタビューを通して地域の復興の歩みを学び、子どもたちが情報をまとめた。後半では、タイの小学生との交流会を英語で実施し、互いの文化を紹介し合いながら地域の魅力を再確認する機会をつくった。最後に、地域の大人を招いた上映会で成果を発表し、学びを地域と世界のつながりとして実感できる場を設けた。

事業名 ふるさと創造・映像教育プロジェクト 2025

団体名 ひろの映像教育実行委員会

この事業のポイント

平成27年度より総合的な学習の時間を活用した※シネリテラシーによる「ふるさと創造学」を開始した。生徒たちには、自分たちが生活している地元地域の歴史、文化、伝統、くらし等について見つめなおしてもらい、地域住民とのふれあいの中で、広野町、郡内の魅力のある部分を発見、再確認したことを、中学生ならではの視点で自分たちの考えや思いを大勢の人たちに伝えるためにはどうしたら良いのか自主的に活動できるよう目指している。

現在は、新型コロナウイルス感染症の影響により、活動の一部制限があったことによって、映像形態にこだわらず、冊子やマップ作成等の新たな手法を用いながら活動を継続してきた。

※シネリテラシー … 映画製作を用いた主体的な学びの手法。

R7・11・29ふるさと創造学サミットで発表している様子

取組内容

1学年テーマ「私が広野町の町長だったら」

自分が町長になると想定し、地域資源のよさを多角的に調べ、町をさらに魅力あふれる町にするにはどのような施策や取組があるかを探究した。

2学年テーマ「働くことを通して地域について考えよう」

SDGsについて学習し、持続可能な社会実現のため「働くこと」が果たす役割について考え、地域で働く人々の仕事等に目を向け、働くことの意義や価値をSDGsの視点と関連づけながら探究を行った。

3学年テーマ「広野町と共生社会」

誰もが安心して暮らせる社会を実現するため自分の町ではどのような取組や工夫が行われているか事例を調べ、多様な立場の人々が共に生きるための課題やよさを見いだし地域に根差した共生のあり方について探究を行った。

事業名 あいづっこから広がる交流事業 ～会津から京都へ、次世代を担う子どもたちが繋ぐ～

団体名 会津若松市 子ども会育成会連絡協議会

この事業のポイント

本会では、「子ども会指導児講習会」事業として、小学４～６年生を対象に３段階方式で体験活動の場を提供する取り組みを行っており、小学４年生（第１期生）では本市少年の家等においてレクリエーションや歴史体験学習、小学５年生（第２期生）では福島県会津自然の家での宿泊学習を実施しており、その集大成として、「ふくしまの未来」へつなぐ体験応援事業を活用し、小学６年生（第３期生）を対象に「県外研修」として本市とゆかりのある自治体を訪れ、各地の子ども会等との交流会を実施している。

本年度の事業は、「事前研修」として「震災講話」、「文化講話」を実施し、震災講話では被災者である教育総務課職員（いわき市出身）の講話、文化講話では会津若松観光ビューローの 近藤 真佐夫 様をお招きし、交流先である京都市と本市との歴史的つながりについての講話を実施した。

県外研修では京都府京都市にある金戒光明寺を訪問し、執事長である 橋本 周現 様の講話をいただいたほか、同志社大学学生とクイズ形式での交流を行い、その中で、「東日本大震災の被害と復興への取り組み」と「会津の魅力」をテーマに福島（会津）の今を発信した。

橋本住職（金戒光明寺）及び
同志社大学学生との集合写真

取組内容

「事前研修」において、震災学習では、震災・原発事故の記憶を将来世代に継承することをねらいとして「東日本大震災による被害」「震災からの復興」「被災者の生の声」「災害への備え」について、写真や映像、ワークを交えながら学ぶ機会を提供した。

また、文化講話ではクイズ形式での２市間共通の歴史を学び、郷土の魅力を再確認する場を提供した。

「県外研修」において、金戒光明寺内や會津墓地の見学、橋本住職による講話、同志社大学学生によるクイズ形式での歴史学習をとおして、２市の魅力を知るとともに、参加した小学生13名それぞれが調べたことをまとめて作成した模造紙「東日本大震災の被害と復興への取り組み」及び「会津の魅力」について堂々と発表を行い、会津から京都へ福島の「今」を伝えることができた。

事業名 未来につながる復興キャンプ 第３弾プロジェクト

団体名 ガールスカウト福島県連盟

この事業のポイント

ガールスカウトの「防災・減災プロジェクト」の一環として継続して実施している。福島の現状や復興の歩みを学び、未来について主体的に考えるとともに、実際の災害発生時に適切な行動がとれる力を育成することを目的としている。専門家による基調講演を通じて防災・減災に関する知識を深め、災害時に役立つ技術や行動を体験的に学習した。また、中学生・高校生会員およびユースが実行委員会として企画・運営に参画し、主体性とリーダーシップの育成を図った。学びや成果はSNSで発信するとともに、「防災アイデアリーフレット」としてまとめ、ガールスカウト内外へ広く周知している。これにより、ガールスカウトのモットー「そなえよつねに」を実践し、地域に貢献できる人材育成につなげていく。

防災チャレンジでの集合写真

取組内容

防災の学びをより多くの人へ広げるため、『防災アイディアブック』を活用した防災イベント「親子で学ぼう！もしもに備える防災チャレンジ」を郡山駅前で開催した。また、アイディアブックをリーフレットとして再編し、県内各地へ配布することで普及啓発を図った。

あわせて、1泊2日の復興キャンプ第3弾のプログラムとして、防災講話や体験学習を実施し、災害時に役立つ知識や技術を実践的に学んだ。これらの取り組みや実践内容はSNSで発信し、福島から防災・減災の大切さを広く発信することができた。

事業名 福島っ子の元気を届けよう！ 世界へ、能登へ

団体名 相馬ながれやま踊りJuniorの会

この事業のポイント

福島っ子だからこそ、能登半島地震を他人事のように感じることはできなかった。この事業をとおして、そのような子どもたちが育ってくれている。令和７年度も能登半島に元気を届けようと足を運び、福島の復興を伝えるとともに「能登の復興」を祈って「相馬ながれやま踊り」の演舞を行った。

令和７年11月23日、午前中は石川県穴水町諸橋地区、午後には同和倉温泉総湯前広場を訪問した。穴水町では「復興フェスティバル」に参加。午前中の活動では、穴水町の皆さまに福島県の復興に向けた取り組みや被災された方々へのメッセージとともに踊りを届けた。東日本大震災の被災地でもある福島県からの踊りを通した激励をとても喜んでいただけた。午後からは和倉温泉総湯前広場に会場を移し演舞した。日本を代表する温泉地の一つでもある和倉温泉の被災は大きな傷跡を残したが、会場の用意などは一昨年以来、「和倉温泉旅館協同組合」が尽力くださっている。演舞する子どもたちにも現地の被害の大きさは十分に伝わったが、こちらでも福島県の復興に向けた取り組みや被災された方々へのメッセージを届けることで被災された方々を激励することができた。

復興を祈願し「相馬ながれやま踊り」を演舞

取組内容

東日本大震災を乗り越えて来た福島県だからこそ、能登の皆さまへ福島の現状を伝えるとともにエールを送った。
場所／石川県能登半島
日程／11月22日(土) ～24日(月)
期間／３日間（２泊３日）

主な内容／昨年に引き続いて七尾市和倉温泉総湯前広場・穴水町にて、福島県の現状を伝え、復興を祈願しての「相馬ながれやま踊り」を演舞し、能登の皆さまに「元気な風」を運んだ。

事業名 2025 年度新地町中高生・夏の学校（拡大版）

団体名 新地アーバンデザインセンター（UDC しんち）

この事業のポイント

本事業の特長は、新地町の中高生を「学ぶ側」にとどめず、新たな「震災の伝承者」として位置づけている点にある。地域の震災語り部との交流を通じて得た学びを、生徒自身の言葉で対外的に発信するプロセスを重視することで、震災を知らない次世代が主体的に継承できる仕組みを構築している。

また、新地アーバンデザインセンター（UDCしんち）を拠点に、東京大学大学院新領域創成科学研究科と連携してきた実績を活かし、被災地と首都圏の大学拠点を結ぶ越境型の学習機会を提供し、「地域の外」の視点で福島を理解する機会を提供している点も本事業ならではの工夫であるといえる。

さらに、大学院の複数の研究室訪問を通じて最先端の科学に触れることで、震災や復興を過去の出来事としてではなく、将来起こりうる自然災害等と結び付けて捉える視点を育み、ふくしまの未来を担う人材育成につなげている。

震災前の公園の様子を語り人から聞く参加者たち

取組内容

○（7/26-7/27)新地町の防災緑地公園を訪問し、震災語り人として活動されている川上さんから公園の成り立ちを学んだ。翌日には振り返りを行い、8月の夏の学校の発表資料を作成した。

○（8/5-8/7）東京大学本郷/柏キャンパスで「夏の学校」に参加し、複数の研究室への訪問を通じて最先端の科学に触れた。また、新地町の復興と現在の状況を複数回発表した。

○（9/26-9/28）ららぽーと柏の葉（千葉県柏市）で開催された東京大学フェアに参加した。新地町の震災から現在に至るまでの軌跡をパネルで展示し、来場者に口頭で説明を行った。このイベントには能登島からも参加があり、被災地間の交流の機会ともなった。

事業名 出張！デザカ 輪島市門前町

団体名 福島県立福島西高等学校美術部

この事業のポイント

「出張！デザカ」は、2017年から実施している活動で、美術やデザインの学びを生かし、学外でその力や良さを伝えていこうとするものである。見た目や形を表現するだけでなく、思いやりを持って、人の生活を今よりも良いものにしたい、という考えを大切に、先輩から後輩へ受け継いできた。

今回の事業は、2024年1月に発災した能登半島沖地震の被災者の方々に楽しんでもらいたいと、私たちの先輩が昨年取り組んだ「ふくしま⇔のと めぐるわっかプロジェクト」を継承する形で、石川県輪島市門前町に訪問し、被災者と交流することを目的として実施した。また、昨年交流した石川県立門前高校の生徒のみなさんと協働することで、被災地の高校生同士がお互いに状況と情報を共有し、災害を自分事として捉えて生きる力を得ることができるとも考え、オンラインミーティングなどを行って実践につなげた。

ミニ三春駒張り子の絵付け

取組内容

1．福島県の復興の現場を知る見学会（8/23）
　飯舘村ながどろ広場、福島県原子力災害伝承館、双葉町内アートウォール、大熊町中間貯蔵施設などを見学し、東日本大震災と福島県の復興の現状を学んだ。

2．石川県輪島市門前町への訪問活動（12/17）
　①總持寺通り商店街「のむらや」を訪問し、手作り起き上がりこぼしを贈呈し交流した。
　②道下仮設住宅集会所で交流会を実施。門前高校生と一緒に企画を考え、仮設住民の方々にクイズ大会、張り子の絵付け、餅つきを楽しんでいただいた。
　③門前高校生と意見交換会を実施。能登沖地震での被災体験、福島県の震災から現在までの状況についてなど話し合った。

事業名 SSH 海外研修「台湾現地研修」2025

団体名 福島県立会津学鳳高等学校 SSH 部

この事業のポイント

本校はSSH（スーパーサイエンスハイスクール）校として文部科学省から指定を受けており、以前より海外研修を実施している。台湾の高校生に対して、福島の現状や課題、復興についてプレゼンし、福島の子どもたちの「ふくしまへの想い」を直接伝える活動は、事業の目的達成に効果的といえる。

正確な知識を基に「想い」を伝えるために、事前研修として２つの活動を行った。一つ目は「福島第一原子力発電所及び楢葉遠隔技術開発センター」の見学及び廃炉に関する学習を行った。見学や所員から説明により原発の現状と廃炉について正しい知識を身に付けた。二つ目は、被災者による講演「震災当時の状況を知る～福島と宮城の状況～」の聴講である。震災当時の福島県浜通り地区や、宮城県の沿岸部の様子などを聴き、質疑や意見交換を行うことで、「ふくしまの未来」への「想い」を深めた。

これらの事前研修を基に、現地研修では台湾の学生たちへ「想い」を伝えるべく、生徒たちは英語でプレゼンテーション発表を行った。

建国高級中學でのプレゼンの様子

取組内容

建国高級中學では、日常生活における現状と復興についてプレゼンを行った。その中で東日本大震災で被災した方の語り部で学んだ内容についても触れ、震災から10年以上の年月が経つが、復興はまだ道半ばであること、それらの課題を解決するための提案を行った。

別日には国立清華大学や関渡自然公園でも大学教授や現地大学生、現地の専門家に対してプレゼンテーションを行い、ふくしまに対する「想い」を生徒それぞれの言葉で伝えた。

事業名 ふくしま CrossTalk Program ～福島の声を世界へ

団体名 特定非営利活動法人 相馬はらがま朝市クラブ

この事業のポイント

ふくしまCrossTalk Programは、福島の「いま」を知り、感じたことを、自分の言葉で世界に伝える体験型のプログラムである。見学や講義を聞くだけではなく、被災地域の住民のお話を聞いたり、仲間と語り合ったりしながら、「自分はどう感じたのか」「何を伝えたいのか」を大切にしている。

英語を使った発表や対話に挑戦するが、上手に話すことが目的ではない。ネイティブ講師とともに学びながら、「伝えたい気持ち」を言葉にする経験を重ねていく。

参加した高校生からは、「福島の見え方が変わった」「自分の考えを英語で伝えられたことが自信につながった」という声も聞かれた。福島と向き合う時間を通して、自分自身の未来や、福島や社会との関わり方を考えるきっかけになることが、このプログラムの大きな魅力である。

英語の解説でめぐる被災地域のフィールドワーク

取組内容

本事業では、浪江町・双葉町でのフィールドワークを通して、被災地域の現状や人々の思いに直接触れる機会を設けた。その体験をもとに、ネイティブ講師のサポートを受けながら、英語で感じたことや考えたことを表現する方法を学んだ。

また、ブリティッシュヒルズでの研修では、英語だけで会話をする環境の中で、ネイティブ講師から英語表現を学び、英語で伝え合う体験を重ねた。最後に、海外とのLIVE配信も通じて、外国の方に福島の現状と自分の思いをプレゼンテーションで発信した。

フィールドでの気づきと研修での学びを行き来することで、高校生が「福島のことを伝えてみたい」という思いを、自分の言葉で形にしていくプロセスを大切にした。

事業名 福島を知る・伝える・盛り上げる 2025

団体名 福島県立ふたば未来学園高等学校 社会起業部

この事業のポイント

震災から10数年がたった現在、双葉郡内に唯一となった高等教育機関のふたば未来学園は、地域と連携し、原発事故によって発生した、あるいは加速した諸問題を考察している。とりわけ本校社会起業部は福島の今を分析し、他地域との比較を行ってきた。具体的な活動としては、双葉郡や福島県を「知る・伝える・盛り上げる」をモットーに、他県から訪問する高校生・大学生と交流活動や動画製作等をしている。本年度も、福島のことを知りたいと本校を訪ねてくる他県の高校生や外国の方などと交流した。

また、福島の原発事故を考察するにあたって、原発事故は核の問題としては広島的であり、NIMBY施設としては沖縄の米軍基地的であり、環境問題としては水俣的であるという仮説から、冬季に水俣と沖縄を２年かけてフィールドワークを行っており2024年末には沖縄研修、2025年の12月は水俣研修を行い福島との比較をするとともに、福島の現状を伝えた。

水俣病患者さんの講話
福島についてアピール

取組内容

「伝える活動」
他県の学生（高大計９校）との交流を行った。

「盛り上げる活動」
福島放送「シェア！」動画提供、
NHKラジオ「アンミカTeen-ager倶楽部」録音出演。

「知る活動」
８月、津波被害学習のため宮城研修を行った。12月には水俣研修を行った。帰路の振り返りでは生徒は以下のような感想を出した。「水銀の問題は福島の除染土問題と似ている、それについて考えさせられる貴重な経験だった」「語り部が少なくなっている。福島でも学生ガイドなどできるようになれば」「情報開示や伝承について考えられた」

事業名 演劇を通じた高校生による葛尾村の震災と復興の記憶発信事業

団体名 一般社団法人葛力創造舎

この事業のポイント

地域の震災と復興の記憶は、文字などの媒体で発信すると事実は伝わってもそのおもいはなかなか伝わりづらいことがある。そこで、演劇という手法を用いて、事実のみではなく、おもいもよりリアリティをもって伝えられると考え本事業を実施した。昨年までの事業から高校生と地域の関係性が構築されており、今年も実施して欲しいとの声があった。本年度は特に、伝統芸能を通じて伝承がなぜ必要なのか？どのうように伝わってきたのか？これからどのように伝えていくか？などを生徒が学んだ。

伝承の方法について学ぶ

取組内容

【取組①葛尾村の震災と復興の記憶の保存活動】
参加する高校生が震災と復興の記憶を知り、住民と関係構築をするためにインタビューを行い演劇を創作する。インタビュー先は高校生が自ら探し決めた。

【取組②葛尾村の震災と復興の記憶の発信活動】
インタビュー時に得た葛尾村の震災と復興の記憶をもとに、葛尾村の住民と、演劇を一つ以上創作した。創作に関しては県外のアーテイストからの指導をいただきながら高校生が創作をおこなった。

事業名 沖縄県立八重山農林高校×福島県立小野高等学校 友好交流事業 2025

団体名 小野町

この事業のポイント

平成28年に友好協定を結んだ、当町に所在する福島県立小野高等学校と沖縄県立八重山農林高等学校との友好交流活動である。これまで、年に１回、お互いの派遣団を受け入れるなど、直接的な交流を通じて、活発な交流を行ってきた。この交流事業の最大のポイントは、互いの地域の魅力や文化に触れることである。交流事業に向けて、復興の現在地や福島の魅力といった、「ふくしま」の今を知ることで、郷土愛を育んだり、発信･交流活動で自主性を育んだりしている。また､両県の魅力をふんだんに詰め込んだ、お菓子作りに取り組み、食を通じた交流によって、福島の魅力を県内だけでなく、県外にも発信することも目的の一つとしている。

「ふくしまの今」を伝えて

取組内容

福島県立小野高等学校の代表生徒10名が、八重山農林高校を訪問し、「ふくしまの今」について、事前学習の学びや気づきを発信することができた。震災が与えた影響や、今もまだ続く復興の現状について、同世代で共有する貴重な機会となった。また、石垣島伝統のお菓子づくりや伝統芸能を体験することで、食や文化を交流することができた。また、両校で商品化したどらやき「結」の販売や、新たに開発に取り組んだお菓子の試食会を行い、地域産業や農業の活性化につながる活動に取り組んだ。

事業名　ふくしま未来創造チャレンジ 2025「学び、感じ、伝え、走る―地域・産業・若者の未来へ」

団体名　福島県立白河実業高等学校 電子科　課題研究班

この事業のポイント

本事業は、福島県中通りに暮らす生徒が、震災を「遠い出来事」にせず、自分事として捉え直すことを狙いとした探究型の学習である。浜通りの被災地（双葉駅周辺）で、津波被害と原発事故による全町避難、復興の現状と新たな町づくりを現地で見聞きし、得た事実と感情を「言語化」して発信へつなげた点に特色がある。さらに、土浦・水戸での街頭発信を通して、他県の人々との対話により学びを検証し、伝え方を磨く循環をつくった。加えて、震災当時に支援してくれた横浜の協力者へ感謝を直接伝える計画や、他県での発信と結び付けて“風化防止と新しいつながり”を生む構造とした。最後に、振り返りと再編集で成果を校内外へ共有し、単発で終わらせず次年度の探究に接続する設計とした

双葉町でのフィールドワーク

取組内容

①浜通り双葉駅周辺を訪問し、被害の痕跡、全町避難の経緯、復興の進捗と課題、新たな町づくりの取組を現地で見学・聞き取りした。
②学んだ内容を班で整理し、気づき・問い・伝えたいことを文章化して、発表資料とチラシを作成した。
③土浦駅・水戸駅周辺で街頭発信を行い、通行者へ資料を用いて説明し、対話を通して理解の広がりと伝達の課題を確認した。
④震災当時に支援していただいた横浜の関係者へ連絡し、直接会って感謝を伝える計画を立案。
⑤活動後に振り返りを実施し、成果を再編集して校内外で共有した。

事業名　「震災の教訓に学ぶ『いのち』と『ふるさと』学習」

団体名　特定非営利活動法人ビーンズふくしま

この事業のポイント

この事業では、震災後に生まれた小学生が、身近にある震災に関連した建物や親世代から語られたり、伝えられたりしたことなどによって持った疑問や関心からの学びをより深め、しっかりと自分に引き付けて考え、教訓やこれからの福島を自分事として考えられるようになることをねらった。実際にいわき市の「アクアマリンふくしま」や「いわき震災伝承みらい館」を実地で視察・見学することで、震災の出来事や教訓をよりリアルに学ぶとともに、自分の生活に引き付けながら、防災への関心を高めることができた。

事後学習や、記録のまとめを実地見学を終えた後に行ったが、地震をはじめとした災害についての理解と、防災への関心が高まったことが、学習シートや模造紙にまとめた壁新聞の中の意見・感想からも見て取ることができ、保護者への発表の機会でも、積極的に取り組みの様子を話している様子が見られた。

いわき震災伝承みらい館にて語り部の方の話に聞き入っている様子

取組内容

事前学習では実地見学を前に、身の回りにある東日本大震災にまつわるものや、これまで見聞きした災害やその後の復興にまつわる話をとりあげ、関心を高めた。その後の実地見学で、アクアマリンふくしま・いわき震災伝承未来館を見学したが、災害や防災など、事前学習の際に持った視点をもとに展示を見てまわり、問題関心と課題意識を持って見学した子にとっては、深い学びとすることができた。さらに実地見学後の記録のまとめと事後学習によって、参加した児童がそれぞれの学びと感想を共有し話し合いの場を持ちながらまとめていく作業をとおして、これからの自分たちの暮らしに関する防災や備えについて、自分ごととして考えることができたことが、その後の発表にもつながった。

事業名　台湾姉妹校との体験的国際交流を通じた未来へ踏み出す力の育成事業「白河旭高から伝えるふくしまの今、そして未来　2025」

団体名　福島県立白河旭高等学校 第１・２学年

この事業のポイント

本事業は、ふくしまの復興と地域の魅力を海外で発信する活動を通して、地域の復興を主体的に考え、ふくしまの今を知り、思いを伝え、発信することを一つの目的としている。

探究学習において、地元白河市及び県南地区の企業や自治体の取組と現状、課題について知るとともに、昨年同様、本校１学年全生徒が、東日本大震災・原子力災害伝承館での研修やフィールドワークを行い、浜通りの復興状況について知見を得た。その上で、地域の魅力について探究していく学びを実施した。学習した内容について、本校の代表生徒が台湾の姉妹校を訪問し、現地の高校生や大学生との交流を通して、ふくしまの復興の現状や地元の魅力を発信した。

また、福島県の復興の現状や魅力を伝えるためには、正確な知識を学び、発信を続けていくことが「ふくしまの未来」へつなげていくために必要であると感じた。今後も地域復興を主体的に考え、行動できる人材の育成を目的としていく。

台湾姉妹校との交流

取組内容

１学年全生徒による東日本大震災・原子力災害伝承館での研修及びフィールドワークを実施し、震災当時の状況や復興の現状を確認した。また、白河市や県南地区の企業、地元自治体の方を講師に招き、それぞれが行っている取組や現状・課題を知った。それらをもとに、ふくしまの伝えるべき現状や魅力等に関して主体的にまとめた。

台湾の国立新竹女子高級中学と姉妹校を締結し、お互いに学校を訪問することで交流を行った。姉妹校を訪問した際に、福島の復興・白河市の魅力・本校の魅力についてプレゼンテーションやグループディスカッションを実施した。交流を通して、台湾の学生の福島に対する認識を確認したり、ふくしまの今を伝えたり、双方向的な学びを体験した。

事業名 震災の記憶と教訓を次の世代へ 2025 ～震災を知り、ふくしまの今を世界に発信する

団体名 福島県立あさか開成高等学校 マルチカルチャラルクラブ (MCC)

この事業のポイント

あさか開成高校 MCCは、地域でのボランティア活動を中心として、「ご縁」を大切にした「つながりづくり」に取り組んでいる。震災を伝える活動にも力を入れ、対話や交流による「想いの共有」と「ふくしまの未来を考えること」を目的として、神戸・広島研修、ハンガリー交流、チャレンジ同窓会（卒業生との交流会）を行った。昨年度ハンガリーで交流したフマギ高校生を福島に迎えられたことは、「つながり」の強さを象徴している。「ハンガリーフェスティバル」では、伝統楽器ツィタラを一緒に演奏し、ハンガリーとの絆をPRした。神戸・広島研修でも、本当にすばらしい方々との出会い「ご縁」をいただいた。本事業参加者の約9割の生徒が、「日本を好きになった」「人の役に立ちたい」「福島をよくしたい」と答えている。「ご縁」を大切にした、国際的な「つながり」「想いの共有」こそが、この事業のポイントであり、福島の未来のあるべき姿であると確信している。

ハンガリーの高校生に福島の魅力を伝える！

取組内容

【ふくしまの今を知る活動】

1　浪江・南相馬研修…福島イノベーションコースト構想と伝承の在り方を学ぶ！
浪江町の（株）ウッドコア・シャインコースト（復興牧場）とおれたちの伝承館を見学

2　福島第一原発と楢葉遠隔技術開発センター研修…復興・廃炉と処理水を学ぶ！

【復興の思いを伝える活動】

1　ハンガリー交流…福島の力強い復興の姿と魅力を伝え、福島ファンを増やす！

2　ハンガリーフェスティバル参加…ハンガリーと福島の絆をPR!

3　神戸・広島研修…平和・伝承・防災のために若者ができることを考える!
①あすパユース震災語り部隊との交流　②盈進中学・高校ヒューマンライツ部との交流　③探究フィールドワーク（自ら考え、自ら動く！）　④広島で被災者支援や復興支援に取り組む団体との交流会（ひろしま避難者の会アスチカ・ひろしま紙芝居村・広島市社会福祉協議会・南相馬ボラバス隊・広島市防災ネットワーク・崇徳高校新聞部・広島経済大学災害を知り未来へつなごうプロジェクト）

4　チャレンジ同窓会（卒業生との交流会）…チャレンジ事業から学び、つながる、続ける！

事業名 「民俗芸能バンク」でつなぐ、福島と石川

団体名 ふくしまバトン

この事業のポイント

私たちがポイントとしたのは、「①東日本大震災について知る」「②現地のお祭りに参加させていただくにあたって、『お祭りや民俗芸能』が地域の人たちにどのような影響を与えているのかを考える」「③東日本大震災時の支援の感謝を伝えると共に福島をPRする」の３つです。①では、昨年度と同様に参加者のほとんどが震災について知らない、或いは産まれていない子どもたちばかりだった為、東日本大震災がどんな災害だったのか、またどんな思いで過ごしていたのかを再度インタビューなどを通して、知る活動を行いました。②では、震災の影響で２年ぶりの本開催となった石川県富来地区のお祭りに参加するにあたって、まずはどんなお祭りなのかを調べました。また福島県においても東日本大震災の影響によって、今現在も消滅の危機に瀕しているお祭りや民俗芸能があることから、『お祭りや民俗芸能』と復興の観点から、『お祭りや民俗芸能』が地域の人達に与える影響は何かについて考える活動を行いました。③では、現地での活動において日本舞踊の披露のほか、JAふくしま中央会にご協力いただき、持参した福島の米（コシヒカリ・ひとめぼれ）のプレゼント、そして福島の盆踊りを一緒に踊り、支援への感謝を伝えるとともに、福島 PRをすることができました。

冨木八朔祭礼にて現地の子どもたちと「キリコ」を担ぐ様子

取組内容

1. 事前準備会の開催

「震災後消滅の危機に瀕している福島の「民俗芸能」の復興と現状・能登半島地震と豪雨の現状」について調べ学習を行い、調べた事を共有して石川県での活動へ備えました。

2. 石川県での活動

①金沢市立北鳴中学校・吹奏楽部との交流会
日本舞踊披露とゲーム、福島からのメッセージをお伝えし、赤べこのクッキーをプレゼントしました。

②ボランティア団体「チームこのへん」・宮田さんとの交流会
東日本大震災を機に発足されたボランティア団体の方に、東日本大震災当時のお話や能登半島地震・豪雨当時と現状についてお話を伺いました。

③輪島朝市での交流会
地震と火災によって大きな被害を受けた輪島を訪問し、朝市で買い物をした後、輪島の皆さんと盆踊りの交流会を行いました。

④富来防災センターでの交流会
昨年度も伺った富来防災センターで日本舞踊披露と盆踊り交流、福島からのメッセージをお伝えし、福島のお米をお配りしました。

⑤「冨木八朔祭礼」への参加
地震によって２年ぶりの本開催となった、富来地区に約1000年前から伝わる「冨木八朔祭礼」へ参加させて頂きました。

3. 福島でのミニ報告会

福島に帰ってきてからは、今回事業に参加できなかった仲間達や保護者へ向けた事業報告会も開催しました。

成果発表会

令和8年1月24日（土）に本宮市の「サンライズもとみや」で成果発表会を行いました。ステージ発表13団体、展示発表13団体（重複あり）の協力を得て、150名以上が参加する発表会となりました。それぞれが学んできたこと、取り組んできたことについて発表し、聞き合うことで、さらに学びを深めることができました。

つないできた未来

～本事業を経験した先輩の姿～

●災害によって弱者を救うことの大切さを知り、福祉の問題を学ぼうと考えた。
●原子力災害の被災地の現状を知り考える事から、「コミュティ再生」や「町づくり」について大学で専攻する生徒が生まれた。
●「紙芝居の上演」を、海外や県外（沖縄）で実施したことにより、交流関係ができ、広い視野でのネットワークをつくって、将来の活動の場を考えるようになった。
●本事業を経験し、福島県を主軸に、県外の震災や災害の現状と被災当時の個々の被災者の感情の聞き取り、交流を通して、伝統工芸、地域の生業の伝承のあり方や、復興途上の各地域の実情を自分の肌で感じることができ、福島県の今までを、伝承者として自分の言葉で、県内外の方々へも伝える表現が出来るようになった。
●防災減災で個々の命を守る活動が、地域の活性化と伝統を受け継ぐ未来をまもることに繋がると強く感じた。
●今は福島大学、人間発達文化学類に進学し、将来は防災減災と地域活性化を考え、同意識を広められる小学校教諭となりたいと考えている。
●本事業を通じて、県内外の震災経験者との交流や、福島県の今まで発信活動を県外で行い。心の繋がりが生きがいをもたらすことを、伝えることで実感した。看護師となり、命を支える事、寄り添い心の繋がりを途絶えさせないよう努力し、地域活性化に努めたいと考えている。
●本事業を経験し、防災に興味関心が高まり、大学で防災について学び活躍しています。
●本事業を通じて、福島県のために働きたいと考え、地元の大学に進学し、地域行政について学びを深めています。
●本事業で福島の震災を語り継ぐ活動を続けたいと考え、FukushimaDayすばるという語り部団体を作り、仲間と活動を続けています。
●本事業を通じて、社会貢献活動に興味を持ち、大学でも精力的に活動を続けています。
●本事業を通じて、地域で学ぶことや地域のために活動することの重要性を感じ、専門学校から大学へ進路を変更し、現在地元の公立大学で学んでいます。
●本事業を通じて、昨年度の実行委員を務めた会員が防災に興味を持ち、高校在学中に防災士の資格を取得するなど、主体的な学びと行動につながっています。
●本事業を通して、他県の方々と交流をし「他県の学生はどうして双葉郡に学びに来るのか？」という問いが生まれた。そのことを探究し、総合型選抜で教育学部へ合格、教員を目指すこととなった。
●本事業を通じ、より地元への興味が高まり、自分で行動する自発性も身につきました。それをきっかけに探究活動では地元スーパーと協力し、いちごのフレンチトースト、クッキーサンドを開発した。卒業後は第一希望の地元企業に就職した。
●本事業を通じ、福祉に興味を持ち、高校卒業後言語聴覚士になるため進学。
●本事業を経験し、伝承についての考えが深まった。探究活動としてもさまざまなところで発信しています。
●本事業を留学時に経験し、帰国しても日本の思い出として発信しています。
●本事業で実施される活動が毎年後輩と交流する機会になっています。
●本事業を経験し、地域活性化への興味関心が高まり、学びを深めるため、大学へ進学し、地域貢献のために尽力できるよう努力を続けている。
●本事業で、八重山農林高校生と交流し、新たな価値観に触れたり、福島と異なる文化を体験したりしたことをとおして、学校をより良いものにできるよう、リーダーシップを発揮し、生徒会役員として活躍を続けている。
●本事業を通して自身の成長を実感し、参加者としてではなく引率側として現在は本事業に携わっています。
●本事業において、東京・横浜にて「福島PR活動」を行った経験を元に、マーケティングについて興味関心を持ち、大学ではマーケティングを専攻し頑張っています。
●被災地でのお年寄りの介護の現状を見て、高校卒業後介護の仕事についた者がいます。
●避難所や仮設住宅での被災者の健康状態を見て、看護師になった者もいます。